
ラブカクテルス その82

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その82

【Nコード】

N1469F

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は唐突なキツカケで出来たカラ口のカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は角でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私はその朝起きて、ひどい頭痛がするのに気付いた。

風邪でもひいたようだ。

あまりの頭痛に、そのズキズキしている額の少し上の方を手で撫でる。

いや？

なんだろうか、頭に何かがかくつついている。

私はその気になる物が何なのかを手触りで確かめてみたが、固く、ザラザラしたその突起。

まるで角でも付いているような。

私は飛び起きた。

確かに角、紛れもなく角らしいそれは、誰かのイタズラなのか、と
りあえず引っ張って見たが、なかなか取れない。

夢だろうか？

しかし絵にあるように頬をツネって見たが、そのやり方が正しいのならばこれが夢でないことを痛みが証明した。
なぜ私に角が？

しかしそんな事が今、最悪なのではなく、この可憐な乙女がこの後、ホの字の彼と二度目のデートだというのに、この有り様ということに私は絶望した。

私は慌てた。

とりあえず何とかしないとマズイ。

私は必死になって角を隠す方法を試し始めた。

角にファンデーションを塗り込みながら、自分の肌に色合いを近づけたら意外と分からなくなるかもと、なかなか難しいながらもそれらしい頃合いにちかくはしてみたが、やはりその突起であることは目立つ。

まるでしようもなく、ヤケにトガツたコブみたいだ。

なかなかイケるなんて、とても言えない。

それならばと、次は帽子を角に合わせた位置で被り、それで隠すのはどうだろうか、一応お気に入りですの小さなキャップ帽を何とかヘアピンでガッチリ止めてみたが、しかしとても不自然な感じだ。参った。

しかし諦める訳にはいかない。そこで、あまり普段から被ったことがない、ツバの長い麦ワラ帽子なんかならどうだろうか、洋服筆笥の上をひっかき回して埃だらけのそれを慌てて粗方キレイにし、とりあえず被ってみた。

鏡の中の私の顔は非常にオドオドとしていたが、意外に角は目立たなかった。

私はこれしかない、今はこれ以上のクオリティなどを考える余裕もなく、鏡の自分に言い聞かせる。

あまり日差しがキツイという訳ではない天気ではあったが、仕方ない。

だんだんと秋が近づいているくらいはこの季節だったのがとりあえず幸いだったと、私は胸を撫で下ろし、その麦ワラに合うワンピースを選んで、約束の場所へと急いだのだった。

私は移動中、なるべく顔を上げないように気を配った。

周りに角が気付かれないようにうつ向き加減で早足に努め、電車では扉の脇で外を眺める振りをして他の乗客からの孤立を図った。

なんだかあまりに夢中で目的地に向かっていたせいで、私は気が付くと待ち合わせ場所にいたような錯覚に、なんだか頭が着いていない感じだった。

そしてそこで我に返った私は、待ち合わせ場所で先に来て待っていた彼の背中を見つけて思わず飛び付いた。

彼はおっ、と声を出して驚きながらそんな私に気付き、そして何を思ったのか、私の麦ワラ帽子に手を掛けた。

私が必死で頼りたかったが故に抱きついたのが、ふざけたじゃれあいにでも取られ、お返しでもしているかのようなそのイタズラに、私は激しく抵抗しようとしたが、彼のタイミングの良さが予想外に早く、麦ワラ帽子は簡単に取り上げられ、私は思わず泣きだしそうになりながら、どうしようもない彼の反応を待った。

すると彼はやっぱりと、少し笑いながら言っと、帽子を私に返した。私はなんでやっぱりなのかと顔を上げて驚いた。

なぜならそんな彼の額にも、立派な角が二本生えていたのだった。

私はぽかーんとそれを見てみると、彼は照れながら自分の角を撫でる。

なんで彼にも角があるのだろうか？

しかも二本も。

その時初めて顔を上げて見た世間の様子にはさらに驚いた。

あっちもこっちも、至るところにいる人々の全ての額に角が。

周りの様子に目を泳がせている私に彼は、オイオイまさか知らないのかと、今朝のテレビのニュースを教えてください。

そこでは、原因は解らないが、いきなり人間の額に角が全国各地で生え出し、騒ぎになっているという内容だった。

私は確かに、自分の額のことだけかと、テレビも世間も見ずにここまで来たことを思い出し、なんだかわからないが、自分だけではないことにいささかホツとした。

すると彼は私の角を触り、意外と似合つてると言った。

私はかなり照れて、顔を赤くすると、なんと角も赤く光った。

私も彼もそんな角を見てクスクスと笑うのだった。

それからしばらくして、角は骨から突然に隆起した体の一部だと発表され、男性には二本、女性には一本、それから激しい感情に伴い、色を出して光るなんてことも研究でわかったと発表されたが、そんなことは研究しなくてもわかることだった。

そんな摩訶不思議な事が自分達の身に起きたとしても、世間は混乱も脅えも見せることなく、直ぐさま受け入れてしまうのには、さすがにたくましさをさえも感じてしまったが、確かに角が生えた事で生活に支障が出たかと言えば、そんな事はなかったのは事実だった。

その内、角はだんだんとファッション業界に注目され、先ずは女性用にリボンや髪飾りのような角飾りが売られると、それが瞬く間に流行となり、一つのブームになった。

それから年を追うごとにそれらは形を変えて、ネイルアートならぬ角アートや、穴を開けてピアスを付ける楽しみ方、又は角を削つて独特な形に仕上げる角タトゥーなども現れ、若者は角を大いに楽しんだ。

そして新しく生まれてくる赤ちゃんには、さすがに角はなかったものの、十才を過ぎた頃になると額からゆっくりと角は生えてきた。しかし皆は、なぜ角がという問いをあまり思ふ事なく過ごしていたある日、こんな事が起きた。

大量の隕石の襲来だった。

隕石は、宇宙のどこからか、世界各地に無数に降り注ぎ、あるものは家を薙ぎ倒し、建物を砕き、人を襲い、町を燃やした。

突然のその襲来は誰にも止める事がもちろん出来ずに、しかも避難する時間すらなかったため、被害は全世界に広がり、生き残った人々は家族を亡くし、家を、財産を隕石によつて無くした。

そんな人々は悲しみに震え、角を青く輝かせ、髪の毛はあまりのシヨックで殆どが白髪になった。

しかし降り注いだ隕石はそれで終わらなかった。

隕石襲来からしばらくして、石の塊だと思っていた隕石から、ヤケに小さな人によく似た生物、異星人が出てきたのだった。

しかも一つのそれからぞろぞろと。

人間達はそれには驚いた。

まさか隕石の襲来が異星人の襲来だったなんて。

しかしよくよくその生命体の様子を見てみると、何だか弱々しく、しかも見た目が非常に憎たらしい姿をしていて、無償に腹が立つてくる。

人々はそんな感情から無くした全ての犠牲の恨みを覚えて、怒りに駆られ、角を金色に光らせた。

そんな中、若者が勢い余つて、その異星人の大群に身を乗り出し襲いかかった。

すると異星人達は反撃するどころか、逃げ回り始めた。

そして若者は捕まえた異星人を思い切り地面に叩きつけると、プチット、なんだかスツキリする音と共にあっけなく動かなくなった。

若者は一匹のそれだけでは満足出来る様子もなく、他の異星人をも追いかけて回し、何匹も何匹も同じように退治するかのよう襲いかかった。

それを見ていた中年の男は若者を止めに入ろうとしたが、倒れていった筈の異星人がまたムクツと起き上がり、その男の足によじ登ってきたので驚いた。

男は悲鳴を挙げながら足をジタバタさせ、それを捕まえると、まるで害虫のようにそれを地面に投げつけた。

するとその残忍だと思っていた行為が、とても気持ちいいと感じることに気付き、無意識に男も若者と一緒に異星人を追いかけた。そしていつの間にか、その周りでは同じ事をする人々と、逃げ惑う異星人でゴツタ返したのだった。

そしてそれから隕石は定期的に幾つも降り注ぎ、その度に人々は残忍な手口で石から出てくる異星人を虐めながら、それを楽しむようになった。

ある地方では異星人の釜炊き、他の地方では小高い丘に針を並べた串差し、はたまた他の地方では異星人の切り刻み、そして、

どうですか、新しい地獄の様子は？

はい。さすがは神様の予想通りで、あそこの人間達ときたら残忍で残忍で、他の星の罪人はかなり苦しんでいました。

そうだろう、そうだろう。

あそこの星の住人ときたら、自分達と同じ種族ともしょっちゅう争いをしていたし、その度に私のせいだとか、私に助けてくれたとか都合がいいことばかり言い出す。

面倒をみるのもさすがに疲れたところだった。

そこで前々から、あそこを地獄にするのが何よりふさわしいと、兼がね思っていた所だったのだ。

確かに適任ですよ。

教えなくてもあんなに恐い鬼に誰もがなれたのですから。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1469f/>

ラブカクテルス その82

2010年11月20日14時34分発行